

「満蒙開拓歴史展」の開催

取組に至る背景・事業の目的

戦時中、国策として旧満州に約 27 万人の農業移民が送出された。長野県は全国で最も多い 34,000 人を、飯田下伊那はその 4 分の 1 である 8,400 人を送り出し、半数が現地で犠牲となり帰らぬ人となった。

満蒙開拓の歴史は戦争の悲惨さを伝えるだけでなく、これからのあるべき社会の姿や、社会にどう向き合っていくべきかを一人ひとりに問いかける「負の遺産」である。

当準備会では、全国で唯一となる「満蒙開拓平和記念館」の建設計画に取り組んでいる。その事業展開の一環として、開拓関係者が高齢化する中、風化しつつあるこの歴史を今こそ学び、伝えなければならないという思いで、戦後 65 年目の夏、「満蒙開拓歴史展」を開催した。

事業内容

下伊那地域の農村から多くの人々を送り出した満蒙開拓をテーマとしたシンポジウムや資料の展示、語り部による体験談を発表する歴史展を開催することで、先人たちの持つ貴重な体験や歴史を学ぶ機会を提供した。

事業効果

全国から予想を上回る延べ 1,800 人ももの来場者があり、多くの人と満蒙開拓の歴史から戦争について学び、平和の大切さを共有する機会を得た。また、パネルの作成段階において、貴重なポスターや写真などを提供いただき、資料の掘り起こしとなった。

「語り部」の会場では活発な質疑や感想があり、苦勞してこられた体験者、中国帰国者への理解が深まった。また、自らも開拓団であったという方々の参加、発言もあり、この歴史がまだ語り尽くされていないことが分かった。

リレー講義においては満蒙開拓の歴史を多面的に検証する試みができる。連日、新聞やテレビなどで報道され、満蒙開拓の歴史への関心が高まった。事業終了後も、作成したパネルの貸出しをおこない、啓蒙活動のツールとして有効利用している。県内各地の関係団体の協力による巡回展の開催は、予約を含めて 20 ヶ所にのぼっている。建設準備を進めている「満蒙開拓平和記念館」への理解を深めていただくことができた。



【体験談を発表する語り部】



【パネル展の様子】

工夫・苦勞した点、課題、今後の取組など

満蒙開拓の歴史を資料や写真で紹介するパネル展示、中国残留孤児 2 世の作家による講演会、体験者である「語り部」の話、歴史を検証したテレビ番組の上映、研究者・識者によるリレー講義など、9 日間という長い日程の中で複数の催しを企画し、様々な来場者のニーズに応えられるようにした。

「語り部」18 人が話す貴重な機会であったため、映像記録として残せたことは良かった。また、交通アクセスや宿泊、参加者の昼食など多岐にわたる課題の対応に苦勞した。

若い世代、特に夏休み中の大学生などの来場に期待したが参加は少なく、周到的呼びかけが必要であった。今後は、若い世代や無関心層にも理解を得られるような取組が必要であり、一般の方々も参加できる勉強会や交流会を催し、記念館建設に向け活動の輪を広げていきたい。

【選定のポイント】

今まで語られることのなかった悲惨な満蒙開拓の歴史を県内外延べ 1,800 名に知ってもらう機会を提供することで、平和の大切さを将来に向け伝え残した活動となり、また、歴史展終了後も県内各地でパネル展を開催するなど、継続した取組みが行われており、高く評価できる。

団体名	満蒙開拓平和記念館事業準備会（阿智村）	事業タイプ	ソフト事業
連絡先	0265-43-5580	事業費	1,780,969円
		支援金額	1,750,000円